

海賊の故里を訪ねて

香川県塩飽諸島

近 藤 嘉 彦

1. 塩飽の紹介

『島嶼はその面積の狭小なる割合からすれば、数倍の歴史を演じている。』という言葉は塩飽を表現したのではないかと感じさせられる。こういう伝説と歴史を豊富にとり揃えた塩飽諸島へ、12月22日私達関西大学探検部一行20名は出発したのだった。

塩飽諸島は岡山県と香川県の間、備讃瀬戸のほぼ中央に位し、本島を中心とする砥石島、興島、牛島、広島、手島、高見島の七島及び数多の小島から成っている。塩飽という名前は、製塩に関係した塩焼くから変化したとする説と、潮流が複雑で、到る処に急流があり渦を巻き、潮が湧き立ち、潮の泡立っている所が多いので潮湧く、潮泡^うるが^つまって、しわ^くになったという説があるが、塩飽郷土史研究家の真木信夫氏は後説をとっておられる。

2. 海賊から水軍へ

古来より瀬戸内海は状国交通の要所に当り、特にその中央にある塩飽諸島は産業、運輸、軍事等の各方面に重要な役割を果たした。島々は山勝ちで、平地が少く、農業による生計は不安極まりないものであった。ここに塩飽島民が海上に発達せざるを得なかった大きな原因が見られるのである。海軍思想の進歩は島民に操舟、航海、造船技術を発達させた。

塩飽が海賊としての歴史を持つのは神武天皇の御東征に際し、島民が吉備の高島の宮に出動したのに始まる。讃留璽王(サルシオ)の悪魚退治の伝説や神功皇后が三韓征伐の帰途、塩飽本島に立寄られたことなどあるが、何と云っても伝説中の正巻は712年(和銅5年)太安麻呂によって編纂された古事記の中巻で活躍する倭建命の伝説である。建命が今様行政視察に出かけた時、瀬戸内海航行中嵐に出合った。為すすべもなく、唯波の向にまにまに漂っていたと想像される。この時本島の小島が船上に見われ、水先案内を勤めたので命は危機^{イキ}を脱した。この島

をおまつりしてあるのが木鳥神社である。

3. 屋島の前衛防備にあたる

伝説の段階が経って歴史上、明らかになるのは、次の藤原純友の乱からである。時あたかも宮廷文化の華が咲いた奈良朝末期から平安朝にかけて、地方の政治は乱れ、山賊、海賊の類は猛威を振っていた。中でも地の利を得た芸予海峡や備讃瀬戸の島々の海賊は次第に勢力を増していった。これに耳を付けた藤原純友は、伊予の日振島に館をかまえて朝廷に背き、瀬戸内海の手賊を従えて海上の防衛を堅固にした。松島、釜島に城を築いて、暴威をほしいままにした純友に対して、朝廷では、939年、3千余兵を以て一回討伐を試みたが失敗に終り、翌940年、藤原倫実を大将に545百の兵で実施した二回討伐も、塩飽海賊を中心とした反乱軍を打ち破ることはできなかった。この事実からも、当時、塩飽海賊が如何に強力であったか判明出来る。又、これ以後、掠奪を主とする海賊が統卒されて海軍的要素を帯びるようになったことは、日本の海賊の著しい特徴である。

こういった特徴は12世紀後半になると一層顕著になった。源氏が東国に起り陸軍を主体として京に攻めのぼった。平氏は海軍が主力であったため、陸上では惨敗を喫し、屋島に難を逃れた。塩飽海賊を味方に引き入れた平氏は屋島の前衛部隊にこれを当て、防備体制を整えた。1183年10月1日、木曾義仲の將、足利義清は74余の兵を率いて、楠中より西讃岐に渡らんとしたが、平重、教経は塩飽の水軍を以て、これを迎え討ち、水島の海戦に勝利を納めた。又翌1184年12月7日の瀬戸の戦にも塩飽水軍のために児島から海上に乗り出せず失敗に終わっている。1185年2月源義経の屋島背面攻囲によって、塩の弟に於ける敗北にいたる次男である。屋島を追われた平氏は西長門に向う途中、老人、婦女子の庇護依頼のため塩飽本島に立ち寄ったと言われる。これは如何に平氏が塩飽の水軍を信頼していたかということを物語るものである。又これは当時の日記「玉葉」によっても明らかである。「元暦2年3月16日伝え聞く、平家塩飽にありと。」

4. 足利尊氏の東上に従う

さて1333年(元弘3年)鎌倉幕府は滅亡した。1274、1281年と二度にわたって蒙古の来寇を受けた幕府は財政難に陥り、世の政治は乱れた。

1334年後醍醐天皇は建武の中興を計り、楠木正成、足利尊氏や新田義貞など

に討幕を命じた。建武の中興も結局失敗に帰し、足利尊氏は兵を率いて京都に乱入したが北畠顕家らの追討に会い遠く九州に落ちのび再挙をはかることになった。その間、赤松、今川氏らは中国、細川氏は四国を制覇して、瀬戸内海の海上権を掌握した。菊池武敏を多々良の浜に破った尊氏は1336年4月太宰府を出発して東上、弟直義は陸路、尊氏は海上から兵を進めた。塩飽諸島へ接近した時、細川氏の一族が塩飽水軍及び5百艘、兵5千余と共に加担したので、非常な勢力を得た。統勢は一先ず備前の児島に寄航し、後、大宰東上し、生田森に上陸した。彼は直義の軍と合し、和田岬の新田義貞を追い、湊川に楠木正成を破って京都に入り、遂に足利の覇業を成し遂げた。ここに室町幕府は開かれたのである。

5. 吉野朝に忠勤をつくす

当時、瀬戸内海は足利の勢力下にあり、又細川の支配下にあったが、塩飽島民の中には足利尊氏の叛乱によって、吉野に移られた後醍醐天皇を支持する者が少なからず、吉野朝に貢献したものも多くあった。又塩飽は、日本の政権を得るために、島民を味方に引き入れるかどうかにかかっているところまで脚光を浴びるようになっていた。

かくて世は足利の天下となった。懷良親王が征西將軍宮となり九州に下向し、股星義助が四国大將軍として伊予に向った時、瀬戸内海航路をとったことは明かであるが、前述の如く、瀬戸内海は足利氏の勢力範囲内にあって、朝廷方の交通は殆ど遮断されていたと考えられる。この事実から瀬戸内海通過が可能になるのは、当然勤王に志す水軍がなければ出来ないことである。塩飽の水軍が東は小豆島の飽浦氏、西は伊予大島の村上氏、忽那氏などと連絡提携して、此の困難な航運に当った。

1361年10月、細川清氏は吉野朝に帰順して讃岐に渡り、義兵を挙げ勤王方の救助を求めた。東讃岐の十河氏を始め、小豆島の飽浦信ら多数がこれに応じその勢力は強大なものになった。この時、塩飽本島の塩飽十郎も清氏に応じて海上の警備にあたった。

6. 応仁の乱に内海の静謐を保つ

1467～77年、京都を中心に応仁の乱が起った。これは何時全国に波及するかも知れない状態にあった。この時讃岐は東軍の細川勝元の領土であり、塩飽は小豆島と共に細川持賢の所領であったので、備前向を航行する西軍の大内、河野との間に、衝突の可能性は多分にあった。細川勝元はこれを憂い、1467年

5月教書を下して、島民の禍を禁じ、本浦に安居すべきことを命じた。一方、伊予能島の村上兵部太夫からも、飛船を以って浦々に制札を立てて、兵士の乱暴狼藉と上陸を止め、糧食その他船中雑用の徴発を禁止した。従って、両軍の衝突は免がれて、瀬戸内海は静謐を保つことが出来たのである。

7. 海外進出

13世紀後半から14世紀にかけて、中国では元から明へと国政の変遷が行われていた。又朝鮮でも高麗から李成桂の李氏朝鮮が打ち立てられた。一方、我国ではこの頃勘合貿易や私貿易が盛に行われ、商人は朝鮮、或は中国の福建州あたりまで出かけたのである。この貿易の特徴は好条件であれば取引を行い、そうでない時は、武力を行使して掠奪したので、一般に倭寇と呼ばれている。特に西日本からは頻繁に出航した。操舟、造船技術に秀でていた塩飽島民がこれに参加したのは想像に難くない。海賊大將軍宮本佐渡守、その子助左衛門、吉田彦左衛門、妹尾、渡辺等を主として北島師清や大内政弘の指揮の下に勘合貿易に従事し、時に掠奪をほしいままにして、莫大な利益を獲得したので塩飽諸島の豪は栄え、津浦々に到る迄繁昌したと言われた。倭寇については一つのエピソードが伝えられている。1587年、高見島の十助ら十余名が中国の福建州に漂着し、とらえられた。役人の前に出頭してみると、以前難により中国に住みついていて多渡津儀平という同島人であった。彼の役人は非常に懐しく思い、種々物語をした後で、自分は、中国の役人をしている身であるから滞れないが……と、彼らを秘かに母国へ送り返したと言われる。このエピソードは塩飽島民の海外発展の一端を物語っていると考えてよい。

さて、当時の貿易の形態が倭寇によって全て行われたかということそうではない。高麗国は倭寇が亡国の原因となったといっても過言ではないが、高麗にしても李氏朝鮮にしても倭寇滅亡のため日本との正式貿易を望んでいたのである。又元が圧政によって滅んだ後も、明は倭寇に手をやき、日明貿易を開始し、朝貢を許した。この貿易の船の護衛にも塩飽島民は多数当たっているのである。

8. 戦国諸雄に利用される

戦国時代になると、中国、四国の諸雄は勢力伸張のため塩飽諸島の水軍を利用した。1549年2月、細川氏の部将香西元成は塩飽の宮本、吉田を船大將として、中之島の戦いで三好長慶を下し、1571年5月、香西元載が児島に兵を進めた時、吉田、宮本、妹尾、渡辺らが船大將となって、日比、淡川、下津井へ上陸

していった。

毛利氏の勢力が段々盛んになり、殊に伊予能島の村上武吉の一族、宮内大夫が塩飽の代官に補せられてからは、全く小早川隆景の勢力下に屈するようになった。一方、長曾我部元親が土佐から起って、四国を平定するようになると、これに敗れた香川氏部少輔は、1580年広島立石浦へ、宇多津西光寺住職専念は1582年、瀬居島へ逃れ、又、本島の東山城主福田又次郎は亡ぼされて、長曾我部氏の支配するところとなり、宮本、吉田の二氏がその命により、海上警固の任につくことになった。現在、同島には、東山城跡が、又広島には、香川氏家臣の鎧や刀剣が地中から掘り出されて残っている。

9. 織田信長より特権を受く

私達探検部の調査も織田信長の出現によって、いよいよ佳境に入ることになり、緊張を憶える。

塩飽は織田信長の抬頭と共に、これに従い信長の石山本願寺に、1577年、安芸の本願寺門徒が、石山へ兵糧運搬中、宇多津沖合にて、討取ったのを始め大阪表への海上輸送に基力した。その功績によって、信長より朱印状が下附された。その内容は、織田信長から堺港に至る塩飽船に対して、海上の特権を認められたもので、信長の朱印「天下布武」が用いられてある。この特権を触掛りと称し、堺港への上り下りの塩飽の船は、船綱75尋の間の占有権を認められたもので、他国の船が如何に輻輳していても、塩飽の船はその区域内は自由の権利を有し、出入の時も他の船は、その通路を避けて、塩飽の船を通行させねばならないというので、これを犯す者は如何なる処罰を加えても差支えないというのである。これによって塩飽の船は、威勢富に上り、他の羨望の的となるに到った。

10. 豊臣秀吉の船方を勤む

豊臣秀吉が織田信長の命を受けて、毛利氏征伐のため、1582年、備中の高松城を水攻めにした時、毛利氏が伊予能島の村上武吉をして、日比、下津井を固めていたのに対し、塩飽は秀吉の命によって、直島及び伊予の求島の水軍と共に、海上の警固を厳にした。1585年、秀吉が四国を平定せんとして、小西行長を讃岐に向せた時、小西行長の家臣が塩飽へ来て軍船の準備を整え、兵馬糧食の輸送をした。次で1586年、島津征伐のため、仙石権兵衛兵衛秀久は讃岐の兵を率い、長曾我部元親と共に、64余人に令して豊後へ渡った。この時秀吉は塩飽に朱印状を下して、50人衆の船10艘と、水夫1艘に付き5人ずつ50人を出

すように命じた。これにより、塩飽の船田は一航海に5百人の將兵を輸送したことになる。然るに利光川の戦で四国勢は島津の伏兵のために大敗を喫し、船方の功けによりかろうじて帰国したのである。その船方中、塩飽の吉田彦左衛門、その弟孫左衛門、宮本助左衛門、その弟作右衛門、妹尾、渡辺等が船大將として拔群の功をたてた。

1587年3月、秀吉は自ら大軍を率いて九州へ出発し、5月には薩摩の川内川の川口泰平寺に陣を張って、島津氏に城下の盟をなさしめたが、その間も塩飽から、船奉行森勘八、森兵吉の指揮下に、船及び船加子を出して、大阪から薩摩へ軍卒、食糧、馬匹などを輸送した。こうして塩飽は秀吉の西日本平定に大きな貢献をしたのである。

次に1589年12月、小田原の北條氏討伐にも西国の食糧を満載して、大阪を出帆した塩飽の軍船は、熊野灘の波浪を凌ぎ、鳥羽の港に着いた。鳥羽を後にして、遠江灘にさしかかった時、難風に会い、一旦鳥羽に引き返し、天候の回復を待つことにしたが、期日に遅れて、作戦の大事を誤まることになるかも知れない。か程の風涛何事かあらんと、塩飽の船加子達は奮然と起って山なす怒涛と闘いつつ、遂に遠江灘を突破して、食糧全部を小田原に送り届け、その功によって秀吉から恩賞を賜って塩飽船加の勇名は天下に轟いた。

11. 秀吉の朝鮮出兵に多数の水主と船を出す

塩飽海賊史中、最も海賊の海賊たるゆえんを示したのは秀吉の朝鮮征伐に参加したことである。秀吉の究極の目的は明(中国)の征服であったが、当時うつ勃として興隆しつつあった、海外に発展せんとする国民思想の発現でもあった。秀吉として一生の大事業であった関係上、既に1587年の九州征伐の時に夫人淺井氏に手えた書状の中に、その意志を發表し、以来その画策経営に力を盡し、殊に兵馬糧食の輸送には細心周密な準備を進めていた。1591年正月には全国に令して、東は常陸より、西は四国、九州に到る沿岸、北は秋田より南は中国に到る迄、沿岸の諸国は十万石につき大船二艘を建造させ、水夫は家百軒につき十人の割で徴発し、一人に二人扶持を給し、尚妻子にも支給すること等を以てした。これについて、1591年の秀吉より宮本佐渡守に宛てた朱印状によると、塩飽七島から水主650人と船32艘を提出させ、釜山方面への水先案内とした。その頃、讃岐一国の石高は大略15万石であったから、造船数10万石に付き2艘の割合だと、全体で3艘提出すればよいわけである。然るに塩飽からその10余倍に当る32艘の船舶と、650人という多数の水夫の出動を命ぜられたということ

は、1590年以來人名として豊臣氏の船方であり、又当時最も精巧な船舶を有し、水夫の手腕が優秀で、天下にその右に出るものがなかったからである。

朝鮮出陣に伴って、画期的な発達を遂げたのは造船術である。伊勢湾、東海、北陸、瀬戸内海各所で、幾多の造船計画が立てられ、焼々と巨船が建造された。そしてその建造に従事する船大工は直轄地だと何人領地だとを問わず徴用されたので、塩飽に対しても秀次から大船作事の爲、奉行2人を遣わすによって、取人を差し出すようにとの朱印状が下っている。現在、本島の笠島村にある大きな造船所跡が見られるのも、当時の名残りを忍ばせてくれる。

このようにして塩飽島民は、秀吉、秀次の命をうけて、肥前名護屋の本營に到り、或は朝鮮渡船の水先案内に当り、或は大坂、名護屋間の海上輸送に服し、且つは船舶の建官に仕する等、文禄、慶長兩度の出征を通じて前後7年間、鉛書海上の要務に服して、偉大な勲功をあらわし、塩飽船方の名を万世に遺したのである。この間に彼の地より持ち帰ったという、連糸製の涅槃像の掛軸(仏画)や佛具が手島の金輪寺や本島大浦の持宝寺、泊浦の末迎寺などに、什物として伝えられている。又、丸龜市の塩飽町は生駒親王に従って出陣した塩飽水夫が、後に移住して来たので、その町名があると言われている。

12. 朱印状を下附されて人名となる

織田信長の出現によって、応仁の乱に始まる百年の戦国時代に終りを告げ、封建体制の 簞成が完遂していった。ここで特筆すべきことは、徳川家康によって完成された封建制度と本質的に異った自治制度が塩飽諸島に施かれたことである。海上輸送に攻群の功績を立てた塩飽島民に、1590年2月晦日、豊臣秀吉は寺沢越中守の取次にて朱印状を下し、島民650人に豊臣氏の船方に任じ、彼等に全島の惣石高1250石の地を領知せしめた。この結果、諸島は秀吉の直轄地となり、島民650人共有の土地になった。これを大名、小名に対して人名く(にんみよう)という。650人の水夫連から、年寄4人、即ち宮本、真木、吉田、入江の各氏が選ばれて、勤番所で司法、行政等の自治を行ったのである。こうして得た特権は武士といえども島民を切ることはできなかった。刀にかけた武士は大坂表で裁判に附される程であった。

やがて秀吉薨じ、政權が徳川家康に移らんとしている形勢を察知した塩飽島民はこの豊臣家より賜った朱印地の将来が如何になるかを憂慮して、年寄の宮本太夫、真木又左衛門、吉田彦左衛門、入江四郎左衛門らは相談して、その継統方を懇請しようと企てた。宮本、入江は大坂に上り、淀川口にて、西国の大坂方諸

大名の動靜を探查して、逐一徳川方の小笠原越中守に報告し、1600年9月天下分け目の関ヶ原の戦を有利に導いた。9月15日、東軍大勝の報に接するや宮本伝太夫は近江の草津にて、家康の来陣を待ち、戦勝の祝辞を述べ、併せて秀吉の領地朱印状に対する継目朱印状の下附を奏請した。況いで9月25日、家康の大坂城入城後に、入江四郎左衛門と共に、再び伺候し、28日に到って、小笠原越中守の取次を以って、家康からも朱印状を下附された。その後、秀吉の朱印状と共に、歴代將軍の朱印状に替え、徳川250年の人名地として、塩飽の黄金時代を迎えるのである。

13. 幕府の御用船方を勤む

江戸時代の塩飽は、幕府の御用船方として活躍した。即ち、1615年の大坂の陣、1637年の島原の乱には、共に兵士や食糧を輸送し、又江戸城修築の時には大瓦、用木等を運搬した。幕府の目付衆、巡見使、長崎奉行等が下向の時はいつも塩飽から船加子を毎回14~50名出し、これを百余年間継続して勤めたのである。

14. 塩飽船持衆日本の海運界を圧す

江戸時代の塩飽が我国の海運史上に不朽の名を成したのは、奥羽の海運を開いたことである。江戸が幕府の所在地として、日毎に盛んになるにつれ、必需品、殊に米を奥羽地方からの移入に仰いだ。交通不便な当時のことであるから、輸送経路は陸上によることは、とても困難であった。当然水路に依存するところとなり、しかも、海を危険視していたにも拘らず、大輸送の観点から、やむなく、河村瑞賢は、安価に、大量に、且つ安全に輸送するために、堅固な船と熟練した船夫を選び、港湾の修理、運送方法や船夫の規律などを定め、伊勢、尾張、紀伊の船夫による太平洋岸、塩飽、日比直島、河辺、脇浜などの船夫による日本海岸から下関海峡を迂迴して江戸へ達する経路で、米の輸送に成功したのである。この迂迴航行路の開拓によって、江戸に於ける物資の需給政策は解決し、人心は安定し、大江戸興隆の基礎が開かれたのである。新井白石が塩飽の船隻は特に完堅精巧で他に見ることが出来ない。船夫は淳朴正直であり、技能は最も優れているから、特に多く採用せりと称讃している如く、塩飽の船夫の功績は拔群であったと考えられる。

このように発達していった塩飽は、全国到る処に船影のない所がない程、黄金時代を迎えるのである。中でも中島の大船持丸屋五左衛門の名は、丸に「や」の

字の船印と共に、津々浦々に知れ渡り、現在、その全盛時代を忍ぶ鹽物の数々が
中島に残されている。

X X X X

以上、江戸時代までの日本史を背景とした塩飽の歴史を述べた、実質的な調査
にも、また、この記録を書き上げるにも、直接、間接に真木信夫氏に負うところ
大なるものがあつた。最後に感謝の意を表する次第である。尚、明治維新後の塩
飽の歴史には、1960年に迎えた日米通商修交百年記念に関して、日本最初の
太平洋横断に貢献のあつた感臨丸の乗組員として参加している等、近代海運史上
に残した業績は決して少くないが、機会を改めて述べることにしたい。

附 記

郷土史家 真木信夫氏よりの手紙

朝夕稍寒さを覚ゆるようになりました。お変りはございませんか。先日は折角の
御来島にもかゝらず何の風情もなく御便宜もはかり得ず申し訳けありませんで
した御許し下さい

さて先日讃留靈王の伝説をとのことでございまして早速御知らせする筈でしたが
色々差支えかてきて延引致し本日漸くお届けする運びとなりました。この伝説に
は色々ありますが大同小異です。その内の讃留靈公(胤記に據ってお知らせするこ
とにしました。現在の地名を後記しました。御参照下さい。

右延引ながらお知らせ致します

十一月十八日

真 木 信 夫

近 藤 嘉 彦 様

讃 留 靈 王

神武天皇より12代、景行天皇の御宇、23年癸巳、南土佐国奥海に大魚あり。
其の姿鯨の如く、船船を飲み、人肉を食す。南海諸国の年貢公物を、覆没するこ
と勝て計う可らず。古今無双の朝敵なり。是に於て、天皇大いに驚かせ給いて、
悪魚誅戮の為、官兵を差し遣わすに、官兵悉く悪魚の為に噉食せられて、曾て誅
す可き処なし。爰に天皇御子小碓皇子に詔して曰く「汝早く南海に行きて、悪魚

を誅戮し、恒に人民を安穩にすべし云々」と。皇子天皇に奏して曰く「我が生む所の男子、年齢15にして、強力なる勇士なり。号けて靈子と云う。宜しく命を牒して下し給へ」と。天皇厭感極り無し。則ち命を下す。之に因て靈子西海に赴向し僅か10日以内に土佐國に到着す。而して大魚猶土佐海に栖む。靈子土佐國に止住す。故に官軍等土止靈公と称し奉る。又惡魚南海を周廻して阿波國鳴海に栖む。同24年甲午正月一日西海に下行す。同年6月1日讃岐國梶島海に栖て船舶及び官物を飲み、人肉を食す。靈子又同4月3日讃岐國に踰移し、軍船を造作して海に浮べ、14余人の官軍兵士等催集す。同25年乙未5月5日役の船に乗り漕ぎて大魚に向ふ。大魚口を開きて軍船を飲み。之に依て軍兵等魚胎に酔臥して死体の如し。而も尚生を存す。然れども靈子に身悩むこと無く冷然として宛も瑠璃閣に遊戲するが如し。10月10夜を経て尚に身明總して痛む無し。靈子魚胎に於て火を出し之を焼く。大魚逼惱して斃る。爰に靈子劍を振って其の肉を破り胎より出でて天日を見る。日光赫奕たり。乃ち魚屍上に乗る。福江浦に寄着す。時に童子一人忽然として汀濱に影向し靈子に謁し瓶を持ち水を献す。靈子之を服す。味美にして甘露の如し。靈子童子に問うて曰く「天童我に与うる甘水は何処に之水有りや」と。「安庭水是なり」と。靈子又重ねて曰く「天童早く我を伴い水を酌んで魚胎に酔臥せる軍兵に与え、服せしめて活命せしめよ」と。童子即ち瓶に水を酌んで靈子を伴い魚屍上に漕ぎ遷り、即ち水を以て酔臥せる官兵等に与えて之を服せしむ。軍兵等即ち醒寤す。童子彼の軍兵等を伴い陸地に上る。靈子健日と武彦とを郡に上して状を奏せしめ、自分は城を城山に築きて此に留り給う。軍兵等讃留靈公と称し奉る。彼の軍兵の中に4人の將軍あり。讃岐の四箇處に居住す。井戸刑部、田比里師、師田字治、坂本奏胤是なり。土人稱して四天王と云う。靈子三男一女あり。又靈子胸に何耶の黒点あり。故に子孫綾を以て姓氏とす。仲哀天皇の御宇8年己卯9月15日靈子123歳にして薨去す。惡魚の祟を恐れ後人堂を建て、其の靈を祭り魚の御堂と云う。

(讃留靈公)亂記に據る)

鳴海	鳴門海峡
梶島海	瀬戸内海備讃瀬戸の大槌島、小槌島間の梶の門
福江浦	坂出市内金山の福江
安庭水	坂出市西の庄天皇の「 ^{やそはのみづ} 八十八水」
城山	坂出市内の城山
魚御堂	福江に在り